

ワレリウス・マクシムスの文体

吉田俊一郎

1 本論文の目的と対象

この論文は、ワレリウス・マクシムス『記憶に値する行為と言葉』（以下『言行録』と略記）の文体の分析を試みる。『言行録』は、人の持ち得る様々な性質や美德や能力について、また、人の身に生じ得る幸運や逆境などの様々な状況について、それらを適切に体現している良く知られた歴史上の出来事、すなわち「範例」*exempla* を集成したものである。ここで私が注目するのは、ワレリウスが個々の範例をどのように叙述しているかということである。

この論文では、『言行録』の中から5つの章を抜き出し、そこに含まれている全ての範例を分析の対象とする。この著作の構成について確認しておく、現代の印刷本はこれを巻・章・節に分けている*1。このうち、著作全体の構成の基本要素となっているのは章である。章は一つの主題についての範例の集成であり、その主題は章の題名と前書きに示されている。また、節は一つの章に収められた個々の範例に対

*1 『言行録』の巻・章・節への分割は、J. Briscoe (ed.), *Valeri Maximi Facta et Dicta Memorabilia*, B. G. Teubner, Stuttgart & Leipzig, 1998 (Bibliotheca Teubneriana, 2 vols) に基づいている。ただし、一つの節に複数の範例が含まれていると判断できる場合もある。このような箇所では、このテキストではそれ以上の区分を設けていないが、本論文では、D. R. Shackleton-Bailey (ed. & tl.), *Valerius Maximus: Memorable Doings and Sayings*, Harvard University Press, 2000 (Loeb Classical Library, 2 vols) にしたがって、中に含まれる範例を 1a, 1b ... で分けて示してある。

応している。したがって、ある範例の叙述を分析するということは、ある節の叙述を分析するということと同じである。

以下の分析の対象となるのは、6巻2章 (*libere dicta aut facta*)・6巻4章 (*graviter dicta aut facta*)・7巻2章 (*sapienter dicta aut facta*)・7巻3章 (*vafre dicta aut facta*)・9巻11章 (*dicta improba aut facta scelerata*)の5つの章に含まれる範例全てである。これらの章は全て「～な言葉と行為」という題名を持っている。範例というものは言葉または行為から成り立つものである。また、『言行録』という著作の全体が、その題名から推察されるように、「言葉と行為」を伝えるものである。したがって、わざわざ題名に「言葉と行為」と付されているこれらの5章に含まれる節は、特に「模範的な」範例、範例らしい範例であると言える。そのため、これらの章の叙述を分析することは、『言行録』全体の叙述手法を明らかにすることに寄与すると期待できるだろう。

議論を始める前に、これまで『言行録』の文体について言われてきたことをごく簡単に見ておきたい。19世紀から20世紀の後半に至るまで、この著作は専ら典拠探索の対象とされ、ワレリウスの文体が顧みられることは稀であった。例えばノルデンは数行の侮蔑的な文章で彼の文体についての記述を済ませている*2。こうした状況を変え、ワレリウスの文体を真面目な分析の対象としたのは、シンクレアの博士論文であった*3。ただしこの論文は、『言行録』に含まれる修辞学的な文飾の分析を主眼としており、範例を叙述するというこの著作の目的にそれらの文飾がどう関わっているかは扱われていない。こうした

*2 “Valerius Maximus eröffnet die lange Reihe der durch ihre Unnatur bis zur Verzweiflung unerträglichen Schriftsteller in lateinischer Sprache. ... Auf das Widerliche seines Stils, an dem der tumor am meisten charakteristisch ist, habe ich keine Lust einzugehen.” E. Norden, *Die antike Kunstprosa*, Leipzig, 1898, 304-5.

*3 B. W. Sinclair, *Valerius Maximus and the Evolution of Silver Latin*, diss. University of Cincinnati, 1980.

個々の文飾を中心とする文体の研究は、ブルーマーの研究の中の文体を扱った章についても言えることである*4。この後の分析は、こうした傾向とは一線を画するものである。

ある出来事を範例として叙述するには、叙述がある一定の要素を含んでいることが必要である。以下では、まずこの範例叙述の基本要素が何であるかを確認する。次に、『言行録』の中から典型的な章を取り出し、そこに含まれる他の要素にも目を向ける。その後、このようにして取り出された各要素について、この論文で扱う5つの章に含まれる全ての節でどのように扱われているかを分析する。分析の主な目的は、各要素がどのようにして全体と結びつけられているかを解明することにある。最後に、個々の要素の分析を踏まえて、対象とした範例全体に共通する傾向に着目する。

2 叙述の要素

2.1 叙述の要素への着目

ある言行を範例として叙述する際には、どのような要素が含まれる必要があるだろうか。この問題は、『言行録』に限らず、範例というものをを用いる全ての著作について立てることができる。例えば、ワレリウスが大いに依存しているラテン作家の一人であるキケロは、自分の哲学的対話でも弁論でも議論を論証するために多くの範例を用いており、彼が範例を叙述する手法を研究することが可能である。キケロの『アルキアス弁論』の文体について研究したゴトフは、その中の三つの文が「逸話的な」 anecdotal 文体を持っていることを指摘し、それを手がかりとして、キケロが有名な発言を語っている箇所の叙述手法を別

*4 W. M. Bloomer, *Valerius Maximus and the Rhetoric of the New Nobility*, Chapel Hill, 1992, 230–59.

の論文で分析している*5。そこで彼は、そうした箇所には「発話者」「(発話の行われた) 状況」「発話 (そのもの)」の三要素が含まれており、しかもたいていこの順番を守って現れることを見出している。彼が典型例として挙げるのは、次のような箇所である。

bene Sophocles, cum ex eo quidam iam affecto aetate quaereret utereturne rebus veneriis, “Di meliora;”, inquit, “libenter vero istinc sicut ab domino agresti ac furioso perfugi”. (*De sen.* 47)

確かにここでは、「発話者」(Sophocles)、「状況」(cum ... veneriis)、「発話」(“Di ... perfugi”)が整然と並んでいる。キケロの叙述がこのように単純なものだけでないことはゴトフ自身が詳しく論じているが、彼はこれらの要素のこの順序が基本であるという結論に達している。

ゴトフの分析はワレリウスが扱っている「言葉と行為」の片方しか対象としていないが、『言行録』に収められた範例にも適用できるものである。したがって、まず私はここで、範例を記述する基本的な要素として、「行為者」*6「状況」「行為」の三つを設定する。これらがキケロの場合と同じようにワレリウスの範例にも現われているのかどうかは、5つの章に収められた範例全ての分析から明らかになることである。しかしその前に、『言行録』の中から例を取り上げ、これらの基本的な要素以外にもワレリウスの叙述に用いられている要素があるかどうかを確かめたい。

*5 H. C. Gotoff, *Cicero's Elegant Style: An Analysis of the Pro Archia*, University of Illinois Press, 1979. Idem, 'Cicero's Style for Relating Memorable Sayings', *Illinois Classical Studies* 6 (1981), 294-316.

*6 この言葉は「言葉」と「行為」のどちらを行なう者にも適用できるものとする。

2.2 『言行録』に見出される要素

ワレリウスが『言行録』で用いている要素を調べるために、ここではこの論文で扱う章の中から、二つの節を例として取り上げる。一つは、6巻2章に見られる小カトーの範例である。

Quid ergo? libertas sine Catone? non magis quam Cato sine libertate: nam cum in senatorem nocentem et infamem reum iudex sedisset, tabellaeque Cn. Pompei laudationem eius continentes prolatae essent, procul dubio efficaces futurae pro noxio, submovit eas e quaestione legem recitando, qua cautum erat ne senatoribus tali auxilio uti liceret. huic facto persona admirationem admittit: nam quae in alio audacia videretur, in Catone fiducia cognoscitur. (6.2.5) *7

この節には、キケロの場合に見出されたような叙述の基本要素と、それ以外の要素が存在する。まず、行為者 (Cato)、状況 (nam cum ... pro noxio)、行為 (submovit ... liceret) という基本的な要素がこの順序で現われていることが分かる。この点では、ワレリウスの叙述の方法はキケロのものと良く似ている。一方、これらの基本要素の前後には、小カトーの行為とは直接関係のない部分が見出される。これらの部分は、『言行録』の叙述の中でどのような役割を果たしている要素であると分析できるだろうか。

最初の二語 (Quid ergo?) は、前の節からの移行を示す語句である。『言行録』は章の冒頭にある前書きを除けば範例の連続であるから、個々の範例の最初に前の範例との間の区切りとしてこのような語句が置かれることは理解できることである。また、最後の一文 (huic ... cognoscitur) では、ワレリウスは、単に言行を叙述するのではなく、それについて自分がどう考えるかを読者に示している。こうした部分

*7 言行録からの引用は Briscoe (注*1) に拠っている。

は、範例についてのワレリウスの評価を示すものであるから、評価という要素であると言える。

この節の検討から、『言行録』では、言行の叙述の基本と言える行為者、状況、行為の記述の前後に、それを補足する要素が付加されている様子が明らかになった。前に付加される要素としては「移行」、後に付加される要素としては「評価」が見出される。しかし、ワレリウスが範例の叙述に付加しているものは、これらにとどまるものではない。次の例には、別種の要素が見出される。

Idem [sc. Scipio Aemilianus], cum Ser. Sulpicius Galba et Aurelius consules in senatu contenderent uter adversus Viriathum in Hispaniam mitteretur, ac magna inter patres conscriptos dissensio esset, omnibus quonam eius sententia inclinaretur exspectantibus, ‘neutrum’ inquit ‘mihi mitti placet, quia alter nihil habet, alteri nihil est satis’, aequè malam licentis imperii magistram iudicans inopiam atque avaritiam. quo dicto ut neuter in provinciam mitteretur obtinuit. (6.4.2b)

この節では、最初に発言者が示されているので、基本の要素の前には付加されているものがないと言える。ただし、発言者が「(前の範例と) 同じ人」*idem* と言われているので、この語が前の節とこの節との移行を表わしていると考えられる。前の例 (6.2.5) と異なっているのは、叙述の後に付加されている要素である。

この節では、発言者 (*idem*)、状況 (*cum Ser. ... exspectantibus*)、発言 (*‘neutrum ... est satis’*) の後に、発言者であるスキピオにかかる現在分詞が置かれている (*aequè ... iudicans ... avaritiam*)。これは、この範例に対するワレリウス自身の判断を述べたものではないから、先に挙げた節に見られた「評価」とは異なるものである。しかし、スキピオがこの発言を行った際の外的な状況を述べているのでもないから、叙述の基本要素である「状況」とも異なっている。これは、ワレリウスがこの範例の状況と発言内容とを解釈して、スキピオのこのときの意図

を描写したものだと考えられる。このような要素は「意図」と呼べるであろう。

最後の一文 (quo ... obtinuit) は、また新たな要素を成している。ここでは、「評価」とも「意図」とも異なり、ワレリウスによる判断は全く含まれておらず、スキピオの行為によって生じた結果だけが叙述されている。事実を述べているという点では、「状況」と同じであるが、焦点となっている行為や発言の後に生じた事実を扱っているという点で、「状況」とも異なっている。これは、「結果」と名付けられる要素である。

以上の二つの例から、ワレリウスが以下のような要素を用いていることが示された。

1. 移行：節と節の間の移行。
2. 行為者：行為や発言を為す者。
3. 状況：行為や発言が行なわれるに至った周囲の状況。
4. 行為：行為や発言自体。
5. 意図：行為者が行為や発言を行なった際の意図のワレリウスによる推測。
6. 結果：行為や発言の結果として生じた事実。
7. 評価：行為や発言に対してワレリウスが下す評価。

無論これらは上に取り上げた二つの例から導き出されたものであり、その他の章の叙述もこれらの要素で分析できるかどうかは検証を必要とする問題である。この後では、先に限定した5つの章の中でこれらの要素がどのように現われているかを検証する。その際に、それぞれの要素がどのようにして前の要素と結び付けられているか、具体的には接続詞や、前に現われた内容を受ける代名詞に特に着目する。

3 各要素の分析

ここでは、先に挙げられた要素の一つ一つについて、分析対象とする5つの章の中でそれらを含む節を全て挙げていく。各要素が叙述全体とどう結ばれているかに応じて、それらの節は幾つかに分類されている。個々の節は巻・章・節の番号を並べることで示してある（現行の印刷本の表記にしたがって、外国の範例を扱う章は、節番号の前に ext. (=externum) が付されている）。また、全ての節を分類して列挙した後には、それらについての分析を付している。分析の文中に括弧に入れて示されている数字は、その前に掲げられた一覧表に付けられた番号に対応するものである。

■移行 ある節から次の節への移行は、次の節の最初の文に通常示されている。移行を示す表現は、次のように分類できる。

1. 接続詞・副詞：ac ne ... quidem (7.2.ext.9, 7.3.ext.6), age (6.2.12, 7.2.ext.2a, 7.2.ext.10), at (7.3.ext.10), atque (6.4.ext.4), autem (6.4.4, 7.2.ext.3, 7.2.ext.11a, 7.3.7, 7.3.ext.3, 9.11.ext.1, 9.11.ext.2), etiam (6.2.10, 7.2.ext.5, 7.2.ext.8, 7.2.ext.15, 7.3.ext.9, 9.11.4), iam (6.2.11, 6.2.ext.2, 7.2.ext.4), item (7.3.ext.8), nam (7.3.5), ne ... quidem (7.2.ext.17, 9.11.7), nec (6.4.ext.5, 7.2.ext.12), quamquam (9.11.ext.3), quapropter (6.2.4), quoque (7.2.3, 7.2.ext.7, 7.2.ext.13, 7.3.3, 7.3.ext.5), sed (7.2.ext.16, 9.11.ext.4), vero (6.4.3, 7.2.2, 7.3.6, 7.3.ext.4, 9.11.3).
2. 代名詞：idem (6.4.2b, 7.2.ext.1b, 7.2.ext.1c, 7.2.ext.1d, 7.2.ext.2b, 7.2.ext.11b, 7.3.4b).
3. 関係代名詞・関係形容詞：qui (6.2.7, 6.4.ext.1), cuius fati ... (9.11.6), quo in genere ... (7.3.2).

4. 前節との比較：aliquanto speciosius (7.3.9), multo ... sceleratius (9.11.ext.2), nihilo segnior (6.4.2a), non tam atrox (9.11.2), par (6.4.1b, 7.2.6b).
5. 前節との対比：hic ... ille (7.2.5), quantus ... tantus (6.4.ext.3), sed ... quidem ... autem (6.4.ext.2), sic ... vero (6.2.2).
6. 疑問詞：quid? (6.2.3, 7.2.4, 7.2.ext.6), quid ergo? (6.2.5).
7. 感嘆文：quam deinde ... (7.2.6c), quam porro ... (7.2.ext.14).
8. 移行や付加を表わす動詞：adicio (7.2.ext.18, 7.3.10), devortor (7.3.10), transgredior (7.2.6a), venio (7.3.8).
9. その他：eaque ... erit (6.2.7 ad fin.), hanc ... superavit (9.11.5) huic ... consimilis illa (7.3.ext.7), inserit tantis viris ... (6.2.ext.1), inter has ... coniugium esse potuit (6.2.ext.3), quod sequitur ... (7.3.4a), sed ... humilior (6.2.8 ad fin.), summa in hoc ... (7.3.ext.1 ad fin.), tempus deficiet ... (7.2.ext.1).
10. 移行の語句なし：6.2.6, 6.4.5, (6.2.8, 6.2.9, 7.3.ext.1, 7.3.ext.2).

多くの節は単純な接続詞や副詞で前の節と結ばれている (1)。それ以外の移行の方法として目を引くのは、同じ行為者の言行が続けて語られる場合で、このときには代名詞 *idem* が節の冒頭に用いられている (2)。これと対比されるのが前節に現れる人を指す関係詞による移行であり、この場合にはその人物は次の節の言行の行為者ではない (3)。前節との比較 (4) や対比 (5) の表現には、二つの節の間に何らかの関係性を作り出そうとするワレリウスの努力を見出すことができる。それに対して、疑問文 (6) や感嘆文 (7) や動詞 (8) による移行は、特に前後の内容の関連がない場合にも利用されている。その他 (9) 様々な表現が移行を表すために使われているが、そのうち 3 例 (6.2.7, 6.2.8, 7.3.ext.1) では、前の節の最後の文に次の節への移行が含まれている。移行が全くない節 (10) は二つしかなく (括弧に入れて示した節では前の節に移行がある)、極めて稀であると結論づけられる。

■行為者 行為者を表す表現は、移行の語句の直後に現れることが多い（移行の語句が文の二語目に来る接続詞である場合には、行為者が節の冒頭に来ることになる）。行為者は以下のように表現されている。

1. 状況または言動を示す文の主語として：（大多数を占めるため、全て挙げることはしない）
2. 名詞にかかる属格として*8：acta (7.2.6a), animus (6.2.10), astutia (7.3.ext.5), auxilium (7.3.9), cogitatio (9.11.ext.4), consilium (7.2.ext.16, 7.2.ext.17, 7.3.ext.10), dictum (6.4.ext.5, 7.2.ext.13), epistula (7.2.ext.10), factum (7.2.4, 7.2.ext.15), factum et dictum (9.11.2), gravitas (6.4.1b, 6.4.2a), pectus (9.11.4), postulatio (6.2.11), praeceptum (7.2.ext.7 7.2.ext.11b), responsum (7.2.ext.6), sapientia (7.2.6b), sententia (7.2.3, 7.2.ext.4), verba an facta (6.4.4).
3. 「伝える」「聞く」といった伝承を表わす動詞に支配された対格＋不定法の対格として：accipio (7.2.1), fero (7.3.4b).
4. その他の格で：与格 (7.3.5, 7.3.ext.9), 対格 (6.2.3, 7.2.ext.9, 7.3.ext.4), 奪格と主格 (6.2.5)*9, a＋奪格 (9.11.1), inter＋対格 (6.2.ext.3).
5. 節の冒頭に現われない：6.2.1, 6.2.3, 6.2.4, 6.4.1a, 6.4.ext.1, 7.3.1, 7.3.ext.1, 7.3.ext.4, 9.11.ext.1.
6. 前節と同じ主語が idem で表わされる：上を参照。
7. 前節と同じ主語が省略される：7.2.6c.

*8 これは例えば *senatus* の代わりに *acta senatūs* と言い、*M. Castricius* の代わりに *M. Castricii animus* と言うような表現のことである。以下には、行為者を表わしている属格の方は示さず、それがかかっている名詞の方のみを列挙してある。

*9 やや特殊な例である。2.2 節の引用を見よ。

大多数の節では、行為者は行為を表わす文の主語として、または(状況を表わす文が行為を表わす文と独立している場合には) 状況を表わす文の主語として導入されている (1)。行為者を表現するそれ以外の方法のうち最も目立つものは、名詞にかかる属格で行為者が表現されている場合である (2)*10。これらの名詞は、行為または状況を表す文の主語として用いられている場合が多い。こうした表現が多く見られる理由の一つは、表現に変化を与えるためであると考えられる。animus や pectus などの名詞は、それが存在することによって内容面で違いが生れているとは思われなため、表現に変化をつけるためにだけ使われていると言える。だがもう一つの理由として、その行為者の持っている特性を表す抽象名詞が選ばれたと考えることもできる。astutia や sapientia などはこの場合に相当するだろう。行為者が主格でも属格でもない例 (3-4) はそれほど多くない。しかも、これらの一部 (3) は伝聞を表す動詞に支配された対格+不定法の構文中の意味上の主語であり、事実上、主格に置かれている場合と同じと捉えられる。一つの興味深い現象は、行為者が節の冒頭ではなく、途中で導入される場合である (5)。これらの場合、行為者よりも先に状況が述べられていることが多い。これは、最初に確認した「行為者・状況・言行」という叙述の一般的順序に反している。行為者が前節と同じ場合 (6)、代名詞 idem が移行と行為者を共に表現することになる (移行の分析も参照)。前節と行為者が同じであるため省略されている節は一つしかなく (7)、行為者を明示しないことは極めて稀だと言える。

■状況 言行に至る状況は次のような表現で導入されている。

1. cum 節 : 6.2.3, 6.2.5, 6.2.6, 6.2.8, 6.2.9, 6.2.10, 6.2.12, 6.2.ext.3, 6.4.1b, 6.4.2a, 6.4.2b, 6.4.3, 6.4.4, 6.4.ext.1, 6.4.ext.2, 6.4.ext.3, 7.2.5, 7.2.6a, 7.2.6c, 7.2.ext.1d, 7.2.ext.2b, 7.2.ext.3, 7.2.ext.6,

*10 注*8 を参照。

- 7.2.ext.15, 7.2.ext.18, 7.3.2, 7.3.3, 7.3.4a, 7.3.4b, 7.3.6, 7.3.7, 7.3.9, 7.3.10, 7.3.ext.1, 7.3.ext.9, 7.3.ext.10, 9.11.1, 9.11.ext.1.
2. cum 以外の接続詞：postquam (9.11.2), ut (6.4.3, 7.2.ext.16, 7.3.9, 9.11.1).
 3. 独立奪格：6.2.2, 6.2.3, 6.2.10, 6.4.1b, 6.4.2b, 6.4.5, 6.4.ext.1, 6.4.ext.3, 7.2.3, 7.2.ext.1d, 7.2.ext.3, 7.2.ext.6, 7.2.ext.15, 7.2.ext.16, 7.3.4a, 7.3.ext.1, 7.3.ext.2, 9.11.3, 9.11.ext.1.
 4. 主語に一致する分詞・形容詞：6.2.1, 6.2.2, 6.2.4, 6.2.ext.1, 6.4.3, 6.4.4, 6.4.5, 6.4.ext.5, 7.2.4, 7.2.5, 7.2.ext.1c, 7.2.ext.3, 7.2.ext.8, 7.2.ext.11a, 7.2.ext.17, 7.3.2, 7.3.3, 7.3.4a, 7.3.6, 7.3.8, 7.3.ext.6, 7.3.ext.7, 7.3.ext.10, 9.11.2, 9.11.5.
 5. 主語以外の語に一致する分詞：与格の名詞と一致 (6.2.7, 6.2.ext.3, 6.4.ext.4, 7.2.ext.12, 7.2.ext.13), 対格の名詞と一致 (6.2.11, 7.2.6b, 7.2.ext.5, 7.2.ext.10, 7.3.ext.8, 9.11.4, 9.11.7).
 6. 独立した文：6.2.1, 6.2.3, 6.2.4, 6.2.8, 6.2.ext.2, 6.4.1a, 7.2.ext.9, 7.3.1, 7.3.2, 7.3.ext.2, 7.3.ext.4, 7.3.ext.5, 7.3.ext.7, 9.11.2, 9.11.6.

状況の多く（特に短いもの）は、行為者を主語とし言行を主動詞とする文の従属節で表されている（1-3）。今回対象とする章のなかでは、こうした従属節の大半は cum 節（1）または独立奪格（2）である。特に、行為者である主語の直後に cum 節で状況を示す手法は、一つの典型と言える。また、主文の名詞のいずれかに一致する分詞を用いることも、状況の簡潔な表現としてよく用いられている（4-5）。分詞がかけられる名詞は、主語（行為者）であることが多いが（4）、その他の名詞にかかる分詞も見られる（5）。一方で、長い状況の場合には、独立した文であることが少なくない（6）。この場合、状況を表す文が行為者よりも先に置かれていることがある（行為者の分析を参照）。

■言行 言行は例外なく文の主動詞によって表されている*11。したがって、他の要素のように、どのように導入されているかを問題とする必要はない。ただ、ワレリウスが言行を叙述する際に好んで用いている方法には、キケロに見られたような基本的な順序の他に、ある一つの変形が存在する (1)。それは、最初に言行の概略のみを短い一文で述べ、nam, enim などの接続詞や関係詞を介して次の文でそれをより詳細に記述するという手法である。以下にこの手法が用いられている節、及びそれらの節で概略と詳細とがどのように結ばれているかを列挙する。

1. 接続詞：enim (6.2.1, 6.2.12, 6.2.ext.3, 6.4.ext.3, 6.4.ext.4, 7.2.ext.13, 7.2.ext.16, 7.3.3, 7.3.6, 7.3.10, 7.3.ext.9, 9.11.3, 9.11.4), nam (6.2.2, 6.2.5, 6.4.4, 6.4.ext.1, 7.2.6c, 7.2.ext.8, 7.3.2, 7.3.ext.4, 7.3.ext.7, 7.3.ext.10), namque (7.3.3, 7.3.7, 9.11.5).
2. 関係詞：6.2.10, 6.2.11, 6.4.1b, 6.4.2a, 7.2.3, 7.2.ext.4, 7.2.ext.5, 7.2.ext.7, 7.2.ext.10, 7.2.ext.17, 7.3.5, 7.3.9, 7.3.ext.2, 7.3.ext.5, 7.3.ext.10, 9.11.7, 9.11.ext.2.

以上のように、用いられている接続詞は「～というもの」という説明を表すものである (1)。その他、関係詞も詳細の説明を導くものとして使われている (2)。

■意図 行為者の意図を表す表現は以下のように導入されている。

1. 言行を為している主語に一致する分詞：6.2.7, 6.2.12, 6.4.2b, 7.3.3.
2. 動名詞の奪格：6.2.11, 7.2.6a.

*11 言行が様々な段階を持つ複雑な行為である場合、一部が従属節で表されることはある。ただ、言行全体が従属節に置かれている節はない。

3. 目的節：ne (6.4.4, 7.2.4, 7.2.6a), quo + 比較級 + 接続法(7.2.ext.11a, 9.11.1), ut (7.2.5, 7.2.ext.8, 7.2.ext.17, 7.3.4b, 7.3.7, 7.3.ext.8).
4. 理由節：non quod ... sed quod (7.2.1), non quod ... sed ut (7.3.ext.6*12), quia (7.2.2, 7.3.2).
5. 接続詞・関係代名詞・関係形容詞 + 「教える」「示す」などを意味する動詞：monet enim (7.2.ext.7), qua consolatione demonstravit (7.2.ext.2b), qua quidem praedicatione aperte monebat (7.2.ext.1b), quo dicto ... monuit (7.2.ext.9), quo colligebat ... (7.2.ext.2b).
6. その他：videlicet (6.4.5).
7. 言行の前ないし途中に置かれる：6.4.4 (ne 節), 7.3.3 (分詞), 7.3.7, 7.3.ext.8 (ut 節).

意図を表わす主な表現は分詞 (1) と目的節 (2) と理由節 (3) であり、少数ながら動名詞 (4) も用いられている。これらのほとんどは、言行を表す文に従属している。理由節が用いられている例のうち、2 例 (7.2.1, 7.3.ext.6) では動詞が接続法に置かれており、ワレリウスではなく行為者の考えであることが明示されている。他の 2 例 (7.2.2, 7.3.2) では、timebat, arbitrabatur というように、動詞自体が行為者の考えであることを示している。その他、「教える」「示す」を表わす動詞を用いたよく似た表現 (5) が 7 卷 2 章に集中して現われていることが注目に値する。意図は言行の後に置かれる場合がほとんどであるが、最後の 4 例 (7) のみは言行の前ないし途中に置かれている。これは、叙述の基本要素に他の要素が割り込んでいる珍しい例である。

■結果 言行の結果を導入するのは以下のような表現である。

1. 接続詞なし：6.2.3, 6.2.10, 6.2.11, 6.2.ext.1, 7.3.3, 7.3.ext.1, 9.11.5.

*12 これは前半が quod の理由節で、後半は ut で始まる目的節であるが、便宜的にここに含めた。

2. 接続詞：at (6.2.7, 7.2.ext.11a), autem (7.2.5), enim (6.4.3), et (7.3.1), neque (7.3.ext.6), -que (6.4.4, 7.2.ext.18, 9.11.ext.1.), sed (7.2.ext.17).
3. 関係代名詞・形容詞：qui (7.3.10), qua constantia (7.3.ext.9), qua ... festinatione (9.11.1), qua voce (6.2.1), quam rem (7.3.ext.10), quo dicto (6.4.2b), quo facto (7.2.6c), quo odore (7.3.ext.2), quod ... osculum (7.3.2).
4. 前文を受ける代名詞・副詞：hic (6.4.1a), ita (7.3.ext.7), tam (6.2.ext.2).

結果は意図と異なり、言行を表す文から独立した別の文に置かれている場合が最も多い。言行を表す文との間にも接続詞のない場合が多い (1)。接続詞がある場合 (2) でも、用いられている接続詞は *et*, *neque*, *-que* のように前後の関連を明示しないものが多い。また、関係詞を用いて言行を表す文と結ばれている例 (3) が比較的多く見られるが、これらの関係詞も独立した文同士をつなぐ用法であると考えられ (*qui = et is*)、前後の関連を明示しない接続詞の一種と言える。前文を受ける代名詞や副詞がある場合 (4) でも、内容上の結びつきは希薄である。総じて結果は、その前に置かれた叙述の基本要素と切り離されている。

■評価 ワレリウスが個々の言行について下す評価は、次のように導入されている。

1. 接続詞：ceterum (7.3.4a), enim (7.2.2, 7.2.ext.3, 7.2.ext.18, 7.3.5, 9.11.7), ergo (7.3.3), et (7.2.1), etenim (7.2.ext.1a), igitur (6.2.ext.1, 7.2.3, 7.2.ext.2a), itaque (7.2.ext.15, 9.11.5), nam (7.2.2), namque (6.4.1a), quapropter (6.4.4), quia (7.3.5), si quidem (7.2.6b), vero (7.2.6a).
2. 前の内容を受ける代名詞・副詞：hic (6.2.5, 7.3.ext.4), ille (7.2.ext.1d, 7.2.ext.12, 7.3.8), iste (6.4.ext.1, 7.2.ext.10), ita (6.2.4, 7.3.6, 7.3.ext.10), tam (6.4.1b, 7.2.5), tantus (7.3.ext.8), tunc (6.2.6).

3. 関係代名詞・形容詞: qui (7.2.ext.11b, 7.2.ext.16, 9.11.3, 9.11.ext.2.), quod praeceptum (7.3.ext.3), quo sermone (6.4.ext.5).
4. 名詞の付け加え^{*13}: 6.4.ext.3, 9.11.4, 9.11.6.
5. 分詞: 7.3.ext.9.
6. 接続詞なし: 6.2.3, 6.2.8, 6.4.3, 6.4.ext.2, 7.2.ext.1c, 7.3.ext.1, 7.3.ext.2, 7.3.ext.6, 9.11.2, 9.11.ext.3.

評価を導入する方法は様々であり、先に見た意図や結果のように一定の傾向を見出すことはできない。接続詞で前と結ばれる場合が最も多いが (1)、その接続詞のニュアンスは多様である。前の内容を受ける代名詞や副詞 (2) または関係詞 (3) が用いられている節も多い。名詞の付加 (4) や分詞 (5) といった、前の要素と同じ文の中に評価が組み込まれる例は数が少ない。接続詞なしで評価が述べられる場合 (6) は少なくない。これは、評価がしばしば感情的に誇張された表現 (感嘆文や修辭疑問文など) で表されていることと関係すると考えられる^{*14}。

4 結び

以上の各要素の分析から、次のようなことが言える。一つは、ワレリウスが今回取り上げた章を通じて、かなり一貫した叙述方法に従っているということである。個々の節の内容はほぼ決まった要素から成っており、それらの間の順序も大きく動かされることはない。さらに、一つの要素を導入するためには、少数の決まった手法 (決まった接続詞、分詞構文、独立奪格など) が好んで用いられ、変化が少ない。

^{*13} いわゆる *apposition to the sentence* を含む。

^{*14} 例えば、接続詞なしで導入される評価のうち、6.4.1b, 6.4.3, 7.3.ext.2, 9.11.2 は感嘆文である。『言行録』の中の感嘆文、修辭疑問文については、Sinclair (注^{*3}) 95-101 および同書 114-23 をそれぞれ参照せよ。

一方で、より細かく見るならば、ある章に集中して現れる表現が幾つか存在することが分かる。例えば、言行の概略だけを先に述べ、後から詳細を述べる手法（言行の分析を参照）は、7巻3章で頻繁に用いられている。また、意図を導入するために「教える」「示す」といった動詞を用いる表現は、7巻2章の外国の範例の中にのみ集中して現われている。これらの表現がある章で特に多く用いられているということは、ワレリウスの執筆方法に由来すると推測される。ある章に属する節を幾つか続けて書く際に、たまたま頭に浮かんだ表現を繰り返し使い、他の箇所ではそうしなかったのだと仮定すれば、こうした偏りが説明できるからである。